

それでも「書く力」は必要だ

北野小学校長 丹羽 郁人

書く。

ひたすら書く。

机に向かうその清潔なまなざし。

手を休める。

思いをめぐらす。

遠くを見つめるそのやわらかなまなざし。

考えている。

苦しんでいる。

迷っている。もがいている。

でも、まちがいをなく前に進もうとしている。

(某鉛筆会社の広告から)

筆記具を強く握りしめて書くために、右手中指の第一関節左部分の皮膚が隆起し硬くなる。これを「ペンだこ」と言う。

「書け。書け。とにかく書け。」と中学校時代の恩師は繰り返し説いた。書くのはめんどうくさい。いやだなあと思いながらも、私は書いた。力一杯書いたから、「ペンだこ」は大きくはれあがった。鉛筆を握り締めて懸命に勉強した日は、ペンだこはひりひりするほど痛かった。その逆に、あまり充実していなかった日は、ペンだこは鳴りを潜めた。

いつしか、ペンだこは、私の勲章となった……。頑張った日は、いつもペンだこが褒めてくれた。

「書くこと」は実にめんどうくさい。

しかし、「書くこと」で見えてくること、はつきりして多くのことが多いのも事実である。今まで経験してきたぼんやりとしたことが、書くことで、明確な筋道となつて自分の前に現れるときほど、胸が高鳴るときはない。

「書くこと」で、子供たちは自分自身や自分の周りを見つめ直すことができる。と確信している。それは、明日を生きる力を獲得することができるということだ。

「書くこと」は、自分に問いかけることに他ならない。便利なツールは世の中にたくさんあるが、自分と向き合い、過去を見つめる。こうした時間のかかる作業は子供から青年に変わるとの子にも必要だ。



北野小の子供たちが、これからもながく、書いては考え、考えては書きますようにと、強く願っている。

北野小の子供たちの「ペンだこ」は、いつも心地よい痛みとともにある。

それは、逞しく歩んでいく青年としての、

勲章となる。

(二〇二一・六・一七)